

## 【報告 2】

### 日蓮と聖徳太子——近世の伝説から近代の顕彰へ

Yulia BURENINA

日蓮仏教と聖徳太子に関する先行研究は、主に日蓮遺文にみる聖徳太子観と、太子と『法華経』をめぐる研究に大別できる。前者は断片的な研究がほとんどであり、後者は戦前・戦中・戦後を通じて一貫して太子研究に取り組んでいた宗教学者の姉崎正治(1873-1949)が挙げられる。戦前においては、大正期(特に1918～1921年)に『法華』や『大崎学報』等の雑誌メディアで太子への言及が急増する。この時期には、聖徳太子一千三百年御忌奉賛会が積極的に様々な記念事業を展開していたことや、1921年が聖徳太子1300年遠忌・伝教大師1100年遠忌・日蓮降誕700年の、いわばトリプル記念年だったことがその背景にある。昭和初期にも聖徳太子への言及が増えており、戦後の研究でも日蓮との関連で聖徳太子が断続的に取り上げられてはいる<sup>1</sup>。しかし、やはり中心的な課題にはなっていない。そもそも日蓮の教学においては太子が不可欠な存在ではないということがこうした研究状況の一因だろう。

#### 日蓮の聖徳太子観

『法華経』のみが末法の世を救うことができると主張し、『法華経』を重視しない他宗を、日蓮(1222-1282)は強烈に批判したことがよく知られている。したがって、『法華経』が聖徳太子によってもたらされたことや、その注釈も太子によってなされたという意味では、日蓮は太子を崇敬したが、その『法華経』の理解に

---

<sup>1</sup> 例えば以下を参照。浜田本悠「日蓮上人の太子認識」(『宗教公論』25巻4号、1955年)、松木本興「日蓮聖人の遺文に見る聖徳太子」(『日本仏教学会年報』29号、1963年)、小島信泰「聖徳太子と最澄・親鸞・日蓮における太子観」(『東洋哲学研究所紀要』8号、1992年)、養輪顕量「聖徳太子と祖師たち—叡尊と日蓮を中心として—」(『大法輪』87巻7号、2020年7月)。

はむしろ批判的だったと指摘される<sup>2</sup>。また、日蓮が『法華義疏』を閲読したことは『注法華經』に引用していることから知られるが、その教学的価値は否定している<sup>3</sup>(『秀句十勝鈔』1278年)。

とはいえ、日蓮の遺文には太子への言及がよくみられる。では、日蓮にとって太子はどのような存在だったのだろうか。

まず、遺文で確認できるのは、『聖徳太子伝略』系統の太子伝にみられる伝説や説話を積極的に取り入れた、超人的な太子像、例えば、観音の後身や南岳大師の再来(『和漢王代記』1276年)、地相学(『祈禱抄』1272年)や人相学(『崇峻天皇御書』1277年)に精通しており、予知能力を持つ予言者としての太子のイメージである。

また、仏教を興隆した仏教伝持者・日本仏法の祖(『本尊問答抄』1278年)や、中国に使者を派遣し『法華經』を取寄せ(『報恩抄』1276年)、法華・維摩・勝鬘の三經を鎮護国家の法と定め(『撰時抄』1275年)、釈尊を本尊とした(『四條金吾殿御返事』1277年)など、『法華經』を伝持した先駆者としての太子像も散見される。しかし、日蓮は、『法華經』の実義は太子が弘めなかったと考え(『観心本尊抄』1273年、『千日尼御前御返事』1278年)、最澄による『法華經』の弘通との間には明確な一線を画している。

他方、日蓮遺文で興味深いのは、『法華經』に予言された苦行の実践者としての太子像である。具体的に日蓮は、苦行の例として太子が手の皮をはいで『法華經』を書いたことを挙げている(『開目抄』1272年、『事理供養御書』1276年)。だが、実はこの伝説の典拠が不明である。太子ゆかりの宝物のひとつとして中世に知られるようになった『梵網經』<sup>4</sup>についての伝説から着想を得たと考えられ

<sup>2</sup> 小島「聖徳太子と最澄・親鸞・日蓮における太子観」、47頁、榊原史子『聖徳太子信仰とは何か』(勉誠出版、2021年)、194頁。

<sup>3</sup> 「聖徳太子」(立正大学日蓮教学研究所編纂『日蓮聖人遺文辞典(歴史篇)』総本山身延山久遠寺、1985年)548-549頁を参照。

<sup>4</sup> 太子自筆にしてその手の皮が外題に押してあるとされたもの。新川登亀男『聖徳太子の歴史学——記憶と創造の一四〇〇年』(講談社選書メチエ、2007年)、113頁。なお、『梵網經』との関

る。日蓮遺文にはこのような劇的な物語的要素がよく挿入されており、太子の苦行もこうしたエピソードのひとつとして捉えることができる。

さて、シンポジウムでの報告の際には、「近代日蓮仏教における聖徳太子像の種々相」と題して田中智学(1861-1939)や先述した姉崎正治における聖徳太子像の変遷について詳しく述べたが、ここでは同報告で三つ目の事例として紹介した日蓮参籠の「聖跡」を取り上げたい。

### 叡福寺における日蓮参籠の「聖跡」創出

大阪府南河内郡太子町の叡福寺境内にある叡福寺北古墳を、聖徳太子墓(御廟)にあてるのが通説である<sup>5</sup>。叡福寺は戦前、真言宗寺院だったが、現在は単立の宗教法人で太子宗である。太子信仰の聖地としてだけでなく、空海、良忍、親鸞、一遍、日蓮などの高僧が参詣・参籠した寺院として、広く知られている。

しかし、叡福寺境内にある、日蓮に関連する「聖跡」が、近代に入ってから整備されたことはあまり知られていない。「日蓮聖人御参籠舊蹟」の標柱、記念塔(多宝塔)、「聖跡顕彰」の経緯が詳細に記してある石碑などが設置されている。

「聖跡顕彰」の石碑の碑文によると、1921年4月<sup>6</sup>、大阪府本伝寺住職の丸田恵貞(1891-1972)は、叡福寺で行われた聖徳太子1300年遠忌の法要に参列し、「聖跡」の板碑<sup>7</sup>の損傷を憂いたことが発端である。そして、1931年10月13日(日蓮の命日)、日蓮650年遠忌に際し丸田は叡福寺住職の田中法順(1892-1977)の協賛協力を得て記念塔の建立を発願した。1934年「開宗聖日」(4月28日)には除幕式を開催し、宗門がこの「聖跡」を公認したという。碑文の文末には同碑の除幕式が行われたと思われる日付(1936年2月16日、日蓮の誕生日)

---

連の可能性については、すでに望月歓厚が触れている。望月歓厚「日蓮聖人と聖徳太子」(『大崎学報』50号、1918年8月)、58頁。

<sup>5</sup> 叡福寺は太子墓をまつる寺として建立され、開基は聖武天皇とするが、叡福寺の太子墓を聖徳太子の墓に比定することに異論がとなえられている。千田稔『聖徳太子と斑鳩三寺』(吉川弘文館、2016年)、84頁、榊原『聖徳太子信仰とは何か』、134頁。

<sup>6</sup> 1921年4月8日から14日にかけて叡福寺で1300年御遠忌法要が行われている。

<sup>7</sup> これは具体的に何を指しているのか、いつ作られた板碑だったのかは不明。

と当時の日蓮宗管長の氏名(神保日慈、1869-1937)が記されている。

以上の「聖跡」の整備の経緯の他に同碑には、江戸時代の伝記でよくみられるある伝説が詳しく記載されている。すなわち、日蓮が叡福寺に参詣し、7日間参籠して念誦した際、日蓮の前で聖徳太子が示現したというものである。近世の伝説が近代の顕彰碑に発展したわけである。

管見の限り、この伝説は 18～19世紀の複数の日蓮伝記本で確認できる<sup>8</sup>。とりわけ『本化別頭仏祖統紀』の影響が大きい。同書は日潮(1675-1748)が1731年に日蓮450遠忌を期して脱稿した伝記である。史料批判を避けて専ら鑽仰的な記述につとめている。近世の多くの伝記本だけでなく、近代に入ってから作られた叡福寺の案内冊子なども、この伝記の記述を踏襲している<sup>9</sup>。

## 今後の検討課題

総じていえば、近世の日蓮伝記の作成者は祖師信仰にもとづいており、日蓮の霊力・法力を強調するために、奇瑞伝承や夢想譚を多く取り入れ、様々な「聖跡」の在地伝承も織り交ぜている。聖徳太子の示現の伝説は、日蓮における太子信仰を強調するというよりも、神秘的な祖師である日蓮の前では聖徳太子も示現するという、日蓮の超人性を示すエピソードのひとつとしてみることができる。いわば、聖徳太子は日蓮の引き立て役である。しかし、そもそもなぜ、近世においては聖徳太子と日蓮を結びつける必要性が生じたのか、どのようにこの伝説が形成されたのかは検討すべき課題である。

また、近世・近代を通じて、叡福寺側にとっては日蓮宗信徒の参詣を促す上で、日蓮参籠の伝説が有効であり、他方、関西の日蓮宗信徒にとっては、日蓮に関連する「聖跡」が関東には多く、関西にはほとんどなかったという事情もあったのだろう。一方、近代においては、遠忌などの記念年の連鎖によって顕彰イベント

---

<sup>8</sup> 例えば、『本化別頭仏祖統紀』(日潮著、1731年)、『本化別頭高祖伝』(日省著、1736年)、『本化高祖紀年録』(深見要言著、1795年)、『日蓮聖人一代図会』(中村経年著、1858年)、『日蓮大士真実伝』(小川泰堂著、1867年)など。

<sup>9</sup> 『河内国上の太子叡福寺縁起』(1914年)、14頁。著作兼発行人は叡福寺住職の杉本孝順。

が目白押しだったことが、極めて重要な点である。叡福寺の場合は、まず、親鸞650回遠忌(1911年)の翌年に境内で見真大師堂が建立されており、1921年には聖徳太子1300年遠忌の盛大な法要が行われている。そして、前述したように、その法要に参列した丸田恵貞は、日蓮650遠忌(1931年)に際して記念塔の建立を発願し、1934年には記念塔、1936年には顕彰碑が設置されている。その背景には、1933年から1936年にかけてみられた、「日本精神」論の隆盛に伴った聖徳太子ブームもあったと考えられる。

こうして近世の伝説や伝承は、近代に即して読み替えられ、機能し続けていき、そして、新たな意味が付与されることによって新たな聖地も生み出されていったのである。